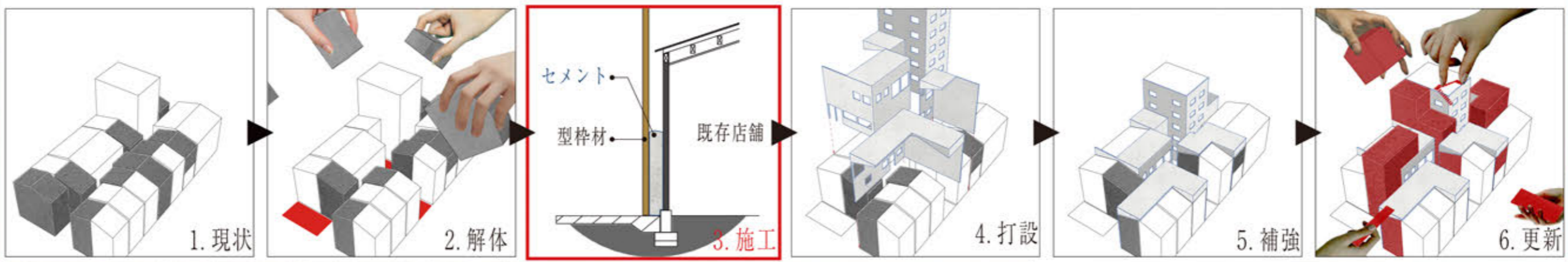


今後迎える震災や火災に対応した空間の骨格となりつつ、闇市的商いがこれからも浸食していく為の小さな余白を描く。

そこで、店舗の外壁を型枠材の一面として、「型」と「テクスチャ」を転写したコンクリート壁を打設する。



もしも 非常時に備える補強・防火壁

「壁」は補強・防火壁として、鶴橋の脆弱なハードを補強していく。

いま 日常を彩る意匠壁

「壁」の包み込む余白に、鶴橋の力強いソフト（闇市的商い）が浸食する。



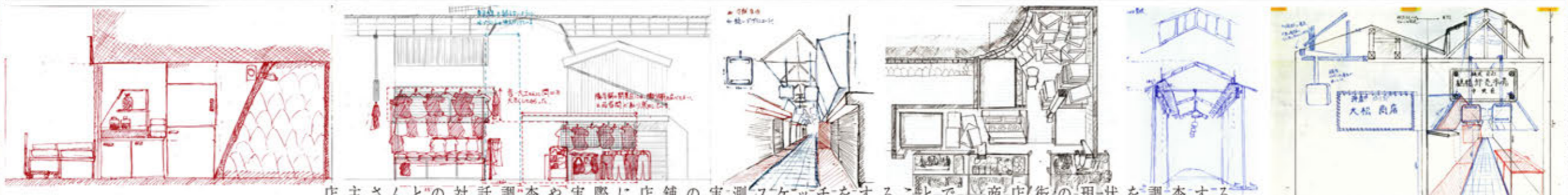
コンクリートの「壁」は、現存する店舗の補強壁や防火壁になる。



繕いの解体新処

商店街の歴史と空間を護る保護膜としての壁のデザイン

闇市時代から受け継がれてきた迷宮路は、バラック店舗の化石によって立体に展開する。



店主さんとの対話調査や実際に店舗の実測スケッチをすることで、商店街の現状を調査する。



裏手に巻き付く「壁」によって補強され、延命した店舗。



いずれ解体され、店舗の「型」を象る「壁」だけが遺る。記憶装置に。



遺された「壁」が持つ小さな余白に闇市的商いが浸食していく。



01 敷地

戦後の闇市を起源とする大阪の鶴橋商店街。今でも闇市時代の薄暗い迷路のような空間が広がっている。



02 調査

闇市由来の独特で力強い商いの力がある。店舗の外側に即物的操作を加えることで領域を拡張。

隣の空き店舗に商品棚が広がる。被服店の前に広がる商品を即座でつけた布屋根。木に実る果実の様に電柱にバックが掛けられる。包まれるような安心感。コロナ禍で顕著に。空白の埋める商品の置き方にもユーモアが溢れる。



03 調査

一方で、戦後から残る店舗は耐震に問題がある。また、倒壊してない家屋は火災の火種になりかねない。



外壁に洋服を貼付けて展示。高さは4mを超える。空き店舗の壁に向い店舗が勝手に商品を並べる。共用の吊り看板に更に洋服が吊るされる。営業中にも関わらず商品棚を日曜大工する店主。壁に棚を増設しただけの幅わずか40cmの靴屋。生鮮食品店は清掃や下処理などを路地にて行う。

